

第1回洞天調査概要

本研究では2009年9月2日から9月12日にかけて、司馬承禎が『天地宮府図』（『雲笈七籤』巻27所引）にいうところの洞天福地のうち、第6大洞天的赤城山洞（浙江省天台県）、第27小洞天的金庭山洞（桐柏観）、第10大洞天的括蒼山洞（浙江省仙居県）、第19小洞天的蓋竹山洞（浙江省臨海県）、第2大洞天的委羽山洞（浙江省台州市黄岩）について実地調査をおこなった。

司馬承禎『天地宮府図』によると、赤城山洞は「上清玉平之洞天」といわれ、「玄洲仙伯」が統治しているとされた。赤城山は天台山塊の南端にあり、天台山といえば司馬承禎が唐の玄宗皇帝に招かれて王屋山に棲む前に居所とした山であり、その居所は桐柏観という古い道観であった。また、この近辺には第9小洞天的四明山洞、第10小洞天的會稽山洞、第16小洞天的天姥峰、第27小洞天的金庭山洞、第34小洞天的天目山洞などがある。

括蒼山洞は「成徳隠玄之洞天」といわれ、北海公涓子が統治しているとされた。括蒼山洞とされる場所には凝真宮という道観があり、そこは地図で括蒼山とされている山塊のふもとの村はづれに位置する。

蓋竹山洞は、「長耀宝光天」といわれ、仙人商丘子が統治するとされた。括蒼山から沿岸の台州にむかう途中にある蓋竹山の頂上近くに位置する。

委羽山洞は台州に隣接する山地（方山）のふもとの村にある小山であり、その下が委羽山洞である。「大有明空之天」といわれ、古くは青童君が統治するとされた。

以上の地点について、その地形・自然景観と現状および関係の文化財について調査するのが今回の主たる目的であり、その調査と成果の概略は本誌に載せている。

【参加者】研究代表者として土屋昌明（専修大学）、研究分担者として大形徹（大阪府立大学）・鈴木健郎（専修大学）・山下一夫（神田外語大学）、研究協力者として裘梧（北京大学哲学系博士課程）・森瑞枝（國學院大学兼任講師）。（それぞれ五十音順、肩書きは当時）

【日程概略】

9月2日 上海空港で集合、車で天台県まで移動

9月3日 天台山（天台県）

桐柏観にて張高澄道長へのインタビュー／周辺の景観および周辺道観がかつてあった地点の調査／国清寺／桐柏観にて道教儀礼の実地調査

9月4日 赤城山（天台県）

紫雲洞、済公院、済公東堂／玉京洞の調査および女性道士へのインタビュー／法雲洞（周辺道観）・梁妃塔

9月5日 天台山（天台県）

天台山桐柏観にて張高澄道長へのインタビュー／天台山中に華頂峰の景観を調査（華頂寺、李白読書堂、方広寺）／天台鎮にて済公廟を調査

9月6日 天台鎮（天台県）

三茅宮・孔子廟の調査（山下・森は帰国）／車で仙居県へ移動・括蒼山の関係者と懇談

9月7日 括蒼山（仙居県）

凝真宮および出土文化財の調査／凝真宮の聞玄真道長および関係者へのインタビュー／周辺景観および南方の洞宮境の確認

9月8日 括蒼山・蓋竹山（仙居県・臨海市）

凝真宮から麻姑岩に登頂して山上の廟を調査／仙居県から臨海市へ移動／臨海市城隍廟から案内を得て蓋竹山に登頂して山上の道観を調査／下山してから城隍廟で道長にインタビュー／車で黄岩へ移動

9月9日 委羽山（黄岩市）

大有宮の調査および関係者へのインタビュー／委羽山に登り山上の騎鶴宮を調査／市内で東岳廟を調査

9月10日 寧波へ移動（寧波市）

黄岩石窟（石切場跡）見学／寧波到着後、天一閣書院を調査

9月11日 四明山（寧波市）

雪竇山資聖寺／四明観および丹洞／寧波市内の城隍廟

9月12日 寧波から上海・帰国

寧波博物館、河姆渡遺跡／上海まで車で移動、上海空港から帰国

【所見】

今回の調査によって、洞天が備える自然環境・地理的条件が一定程度認識できた。洞天はある山岳のエリアを指すが、そこには多くの場合、中心となる洞窟が存在することが確認できた。たとえば括蒼山洞では、巨大なホール状の洞窟の内部にさらに洞窟が存在し、しかもそこから宋代の道教儀礼で使用された金竜が発掘されている。これは、とりもなおさず洞窟そのものが祭祀儀礼の場であったこと、祭祀の対象となる神がその洞窟の内部に存在すると認識されていたことを意味する。したがって、洞天信仰の重点は洞窟の存在にあるということになるであろう。

その洞窟は、委羽山洞の場合のように、飲用可能な清らかな水を湧出させるようである。天

台山桐柏観もダムに水没したとはいえ、そのあたりから湧水があるからこそダムに利用されたのである。

またその洞窟は長大な場合があるようで、括蒼山洞のように、内部で連結している場合があったり、委羽山洞のように、その奥が別の場所に通じているという伝説を生んで、現在でもそれが言い伝えられたりしている。ただし、現状では内部に入っていく便宜は整っていない。

洞窟の所在地には、修道や儀礼のために道観が建設され、それが現代まで続いている。ただし、洞天としての意義は近世になって忘却されていた傾向が強い。ほぼ 21 世紀に入って以降、洞天福地としてのアイデンティティを回復しようとする宗教的な熱意と実践が起こっている。

洞天の山岳は、赤城山洞や委羽山洞のように、その地域で主となる高い山や大きな山塊に接続した小さい山の場合がある。

以上の考察および本誌の各論で言及した洞天に対する所見は、今回のわずかな場所の簡単な調査によるものであり、初歩的所見と言わざるを得ない。今後、より多くの洞天福地の調査から、自然環境や地理的特徴について共通の特徴を帰納していく必要があるとともに、それによって各地の洞天の特色もはっきりしていくものと期待される。

(文責 土屋昌明)